HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	懸賞学生歌の選者の一人の感想
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報
Issue Date	1933-01-18
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77663
Type	column
File Information	A008_17p13-15.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

次の聟は二里ほど隔てた豪農の三男であつた、が、これも同じやうに怖ろしいものでも見たやうに、足を宙に浮かして飛んで戻つてしまつた。斯うした事があつた後に、不思議な噂が大原の里に立つた。

「お龍さんは夜になると、髪の毛が一本々々逆立つて、脊中には鱗が生え焔のやうな紅い舌を長くだして、男の身體をなめるさうだ。あれは蛇體だ、蛇娘だ。」といふのであつた。

此の噂を耳にした親夫婦の驚きと悲しみ、子の可愛いゝといふことを生じ生なか知つたゞけに、身も心も消え入る程に嘆くのであつた。が主膳はかりそめにも弓矢をとつた武士である。

池の主に誓つたにせよ、どうしてこの可愛いゝ娘が戻せるものか、何とかして戻さずに濟む工夫もがなと日夜心を碎いた。「さうだ蛇は鐵を嫌ふといふから、鐵の釘であの池を埋め、主の蛇身を封じてやらう。」子の可愛さに眼の暗んだ父親は、財を散じ人を使つて鐵釘を集め、それをどし〳〵濃ケ池に投込ませた。その度毎に底知れぬ池から湧く水の泡が、主膳には主の大蛇が悶え苦しむやうに考へられてその間だけでも心を安くした。斯うした噂や騒ぎはお龍の耳に入つた。そして、その悲嘆が親にもまさるものであつたことはいふまでもない。

× × ×

山里の日和ぐせか、宵に駒ケ嶽に低くかゝつた雲の脚が、忽ち雨と風を呼んで、降つたり吹いたりしたがそれがけろりと晴れた後には、銀盤のやうな月が青い光りを山一ぱいに投げてゐた。思ひ惱んだお龍はそつと家を脱けだして濃ケ池へ急いだそして手には杖の代りに柳の枝を折つて持つてゐた。池へ着いたお龍は高鳴る胸を押し鎭めて怖いものでも見るやうに、そつと池に顏を映した「アレー」。絹を裂くやうなお龍の叫び聲が、四邊の靜寂を破つて山に谷に反響した。

池に映つた彼女の顏も、姿も、全くの蛇身であつた。が、もう彼女は泣かなかつた。何も彼もあきらめた後の氣安さゝへ見えた。杖の柳を池の邊に挿し、やがて身を躍らして池に投じた。

お龍は斯うして池の主の許に戻つてしまつた。彼女が挿した柳の杖は逆に芽を吹き、今では濃ケ池の逆柳として古木となつた。そして春が來ると狂女の振り亂した髪のやうに葉が茂り、何事かさゝやくやうに水面を撫でてゐる。晴天の日此の池に近づくと水底で機を織る音が聞えるがこれもお龍が世を慕ふての仕業といひ傳へてゐる。

雜報

學校長懸賞學生・歌當選發表

二等　荒木基行
三等　栢野英夫
選外佳作　大久保義通、柴田博士、渡邊高道

注意　四人の選者の評點を平均した結果、一等に値する評點が出來なかつたので、入選歌は二等以下となつた其の爲特に選外佳作を賞の中に加へた。

昭和七年十二月二十一日
刊行部　事務取扱

二等當選歌

農學科一年　荒木基行作

(一)綠！綠！綠の野末に
昇る！昇る！朝陽昇る
燃えよ、若い血！
崇き希望に。
土培へ我が友
光を浴びて。
自化だ！自育だ！
久遠の向上
高く目指して
歩めよ、凛乎と！
進めよ、眞摯に！

我等が前途歡喜あり。

(二)若葉！若葉！若葉の梢に
光る！光る！朝風光る。
燃えよ、若い血！
崇き希望に。
土培へ我が友
光を浴びて。
自化だ！自育だ！
久遠の向上
高く目指して
歩めよ、凛乎と
進めよ、眞摯に！
我等が前途歡喜あり。

三等當選歌

林學科二年　栢野英夫作

(一)あゝ黎明に輝ける
若紫の惠那の峯
雲流れ行く黄昏の
殘照赤き伊吹山
自然の母にいだかれし
我等は各務健兒なり

(二)濃尾原頭に駒を立て
操守十年今此處に
世の盛衰も何かせむ
見よ凛乎たる我意氣を
眞摯たゆまぬ我行手
希望の光輝けり

(三)水無ケ丘の芝草に
まろびて夢む樂園の
責(ツトメ)は重し自治の園
自育自化を胸に祕め

いざや進まぬ我友よ
我等に若き力あり。

選外佳作

林學科一年　大久保義通作

（一）希望の笛を吹けよ若人よ
血潮は燃える水無ヶ原に
培へ鍛へこの腕力を

（二）自然の調を讃へよ學友よ
曙光は輝く學びの庭に
手をとれ歩めこの青空を

（三）若い日本を見つめよ男子よ
綠の理想は大海原越えて
鐘だ夜明だ朝日は躍る

同

農學科三年　柴田博士作

（一）守れよ若人
讃へよ若人
類なき自由と進取の
我等の幸を

（二）たぎる血潮よ
みなぎる力よ
いざ築け若人よ固く
人世の礎

（三）探めよ若人
たゝけよ若人
力以て千古の寶よ
眞理の扉

（四）誇れよ若人
土こそ我等の
友なるぞ土こそ御國の
礎なるぞ

同

農學科三年　渡邊高道作

（一）空は紺青、大氣の彈力
宇宙一杯日の光
のびる若草育てよ若葉
吾等は多感な土の學徒だ
たぎる血潮は『自化自育』

（二）仰げ大空伊吹の秀峰
嚴と動かぬその姿
濃美の王者力の權化
吾等は多感な土の學徒だ
たぎる血潮は『凛乎たれ』

（三）櫻花爛漫美の國日本
朝日に向ふ山櫻
誇らぬ美德聖なる姿
吾等は多感な土の學徒だ
たぎる血潮は眞摯たれ

懸賞學生歌の選者の一人の感想

芒　亭

私が懸賞學生歌應募の二十五通を選者の一人として見せて貰つたのは明けて去年の十月初め頃であつたかと思ふ。愈々全部を一通り見終つてから煙草に火をつけて、煙の行方を見送りながら、私は今見て來た二十五の歌を一度に想ひ浮かべて見るのであつた。夜が更けた書齋に一人坐つて其の詩紫煙の中に描き出された一篇の歌詞、それは二十五の歌が渾然と合一して出來て居るものであつたが、その歌こそ岐阜高農學生の共同製作になるほんとの學生歌だなとさう思つた。その歌は次の樣な事が詠み込んであるものであつた。

第一に、中部日本の山系のうねりが美濃の大平原に溶け込むあたりに木曾川の岸近くに巍然と聳えてゐる城の樣な學校がある。それが私等の學校だ。此のあたりの自然の景色は非常に宏大で明朗である。此の自然的環境の中に生活の舞臺を置いて居る私等は幸福である。

第二に、私等は農學に志して居る關係上こんな自然を自分の生活の中にうんと活かして居る。自然は私等には單なるお飾りではないのだ。私等は人生の窓から自然を眺めると共に、自然の懷から人生を眺めて居る私等こそ一番神に近づく事の出來るものだ。

第三に、私等の生活の標語は自化自育凛乎眞摯と云ふのであるが、此等は私等の單なる看板ではないのである。私等は此等の言葉を大地に鍬で掘りこんで居るのだ。人に示す言葉ではなく、私等の生活の實踐を貫ぬいて居る理想だ。この理想は人に誇る爲ではない、自分自身のものだ。しやかな衿持だ。

第四に、そして最後に、私等は未だ若いのだから血がもえて居るのだ憬がれの夢が目の前にちらついて居る私等にはどこまでが理想でどこまでが空想だかはつきり分らないのだ。だが私等には理想なしには片時も息ぐるしくなるのだ。理想を語り會ふ時の私等の眼の灼熱した光を見るがよい、青春だ、人生はこれからだ。

私が吐き出した煙草の煙の中に二十五通の應募歌が合體して浮び出た一篇の詩は大體右の如き意味のものであつた。

應募歌の一篇づつについて言ふと右の如き意味の一部分を鮮やかに巧みに描き出して居るものもあれば、全體が詠み込んであるのもある。構想や字句の巧拙は自らあるが、意味としては私が前にあげた四項以外のものは大體ない樣である。

歌詞を評點する事は隨分困難な仕事である。數量的にはつきり決定し得ないものゝ評價は、一時間で評點出來るとも云ひ得るが、又一週間かゝつても甲乙に迷ふものである。然し兎に角選者の一人として評點をつけたのであるが、それは主として一篇の歌詞を一つの全體として眺めてつけたのである。凡そ藝術的作品の評價は部分的でなす可きではなく、

全體として評價す可きであるからである。然し私は評點はさうして下したけれども、低い評點のものゝ中にも捨て難き字句を幾つも發見する事が出來た。私の紫煙の中に浮び出たあの一篇の詩を構成して居たのは寧ろ入選しなかつた歌の中のそれらの金玉の文字であつたのではなかつたかとさへ思つてゐる。選中に入らなかつた爲に、それ等の文字が葬り去られる事を私は限りなく惜しく思ふ其意味で私の目に特に光つて映じたそれ等の語句を次に列擧して見る。

○「大地は吾等と共にあり」
○「讃へなん吾は若人
讃へなん吾は自化の兒」
○「夏草繁る丘の邊に
憂ひを秘めて佇めば
牧歌の調べ哀愁の
……」
○「不滅の鋤をひしと取り
衰世の夢を醒す時
若き心に湧き出づる
熱き血潮を君知るや」
○「凛乎眞摯の意氣をもて、永久に幸ある
樂園をいざ諸共に創りなん」
○「吾等は多感な土の學徒だ
たぎる血潮は自化自育」
○「自信と不斷の努力もて
究め盡さん親しまん
宇宙の神秘大自然」
○「……那加台上に春來れば」
○「山河自然の化を亨けし……」
○「月雪花に惠まれる、自然の大を身に
浴びて」
○「野に出でよ野に出でよ」
○「野に讃春の聲高く
凛乎たれ眞摯たれ」
○「凛乎眞摯で行かうぢやないか」

數へあげればまだあると思ふが特に目についたものは右の如きものである。此等の文句を何かに利用したらよいと思ふ。

學校日誌

十月十五日（土）岩城鹿十郎本校講師ヲ囑託ス（前號ニ脫落ニツキ挿入）
十一月五日（土）本校講堂ニ於テ岐阜縣實業教員養成所創立十周年記念式擧行
同十日（木）天皇陛下陸軍特別大演習御統裁ノ爲大阪奈良ニ行幸ノ爲御召列車岐阜驛御通過ニ付職員學生奉送迎
同十一日（金）今明兩日稻田講師來講
同十二日（土）廣島文理科大學長吉田賢龍氏來校參觀
同十六日（水）塚根事務囑託ニ兼講師ヲ囑託ス
同十七日（木）天皇陛下還幸ノ爲岐阜驛御通過ニ付校長以下職員學生奉送迎
岐阜藥學專門學校開校式ニ草場校長參列
同十八日（金）神宮皇學館教授土田誠一氏ヲ聘シ思想問題ニ關スル特別講義實施
同二十七日（日）本校ニ於テ「名古屋生物學會」例會ヲ開催
十二月一日（木）本日ヨリ四日間本校ニ於テ岐阜市婦人會幹部講習會開催
同二日（金）横井常高本校助手ヲ命ス
同十日（土）本校創立記念日ニツキ休業
今明兩日凛眞寮記念祭擧行
同十二日（月）本日ヨリ三日間本校ニ於テ文部省本校共同主催ニ係ル公民教育講座開催
同十六日（金）第三師團司令部附深澤少將來校本校教練ヲ査閲セラル
同二十四日（土）授業本日限リニ付終了式擧行

編輯後記

昨年度内に出すべく前號發表後直ちに原稿締切を致しましたが、一二事情の爲遂本年配布の止むなきに至りました。先輩諸兄からも得難い原稿を戴きましたが、本號は甚だしく頁數の制限を受けましたので惜しくも割愛致しました。

時報の精神等に就ては前編輯子が雄辯に語り盡しましたから、本號では何も言ふべき言葉がありません。

「冬來りなば春遠からじ」

新しき年を迎へて天地に雄飛せられん事を祈ります。（一二一二一　MM生）

昭和八年一月十四日印刷
昭和八年一月十八日發行
（非賣品）
編輯兼發行者　岐阜高等農林學校内　稲垣源十
印刷者　岐阜市七軒町十二番地　河田貞次郎
印刷所　岐阜市七軒町十一番地　西濃印刷株式會社　岐阜支店

『各務研究報告』實費頒布に就て

本校「各務研究報告」を左記の通りお頒けします、御希望の方は實費送料（郵券代用差支なし）を添へ本校「校友組合」へ申込下さい。

記

第十五號　小瀨教授著　甘藷塊並甘藷臺の一新利用法に就て　實費送料共　貳拾貳錢
第十九號　鈴木教授著　農村社會學的部落調査方法　實費送料共　貳拾貳錢
第二十四號　鈴木教授著　農村社會學的貢獻としての英國ルプレー派社會學の研究　實費送料共　貳拾貳錢
第二十五號　小瀨教授著　甘藷の微量成分に關する化學的研究（第一報）　實費送料共　拾貳錢
第二十六號　實驗農場編　本校農場に於ける生産に關する調査　實費送料共　壹圓八錢
第二十七號　井上教授著　農業教育の發達に關する數量的研究　實費送料共　二十二錢